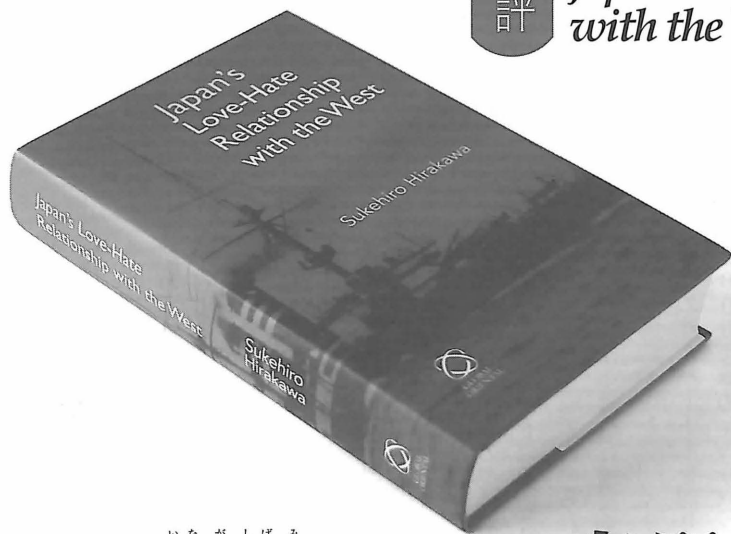


SUKEHIRO HIRAKAWA,
*Japan's Love-Hate Relationship
 with the West*
 (Global Oriental, 2005)



評者 稲賀 繁美
 国際日本文化研究センター、
 総合研究大学院大学教授

野火焼ケドモ尽キズ、 春風吹イテ又生ズ

ぎ
 つしり組まれた557ページのう
 ちに、著者の平川祐弘氏がこの

30年間、主に日本国外の学会で発表し
 てきた英文論文29本が纏められている。
 日本と世界との関わりを包括的に鳥瞰
 しながら、そこに発生した文化交渉史
 上の摩擦や葛藤を個々に等身大で描こ
 うとする意思に貫かれた大著である。
 「日本の西欧との愛憎関係」と題され、
 心理分析を重視するが、本書の射程は

それを遙かに凌駕する。叙述は挑発的、
 構想は野心的、細部は息づき、輻晦と
 は無縁な平易な語り口は、権威的教条
 を辛辣に擲論し、読者を釣り込むだけ
 の魅惑と呼吸とを備えている。

第一部は古代以来の日中文化関係。
 白居易（白樂天）は平安朝で大流

行を見たが、著者はその余韻を太平洋
 戦争末期に見る。敗戦処理に臨んで、
 米内光政海軍大臣を訪れた先輩の山梨

勝之進大將は白樂天の詩を口ずさむ。
 野火の後の芽吹きに戦後の復興が託さ
 れる。

第二部は西欧との出会い。海外密航
 に失敗し処刑された吉田松陰と、渡海
 のち帰国して同志社を興した新島襄。
 あるいは『西国立志篇』の中村正直と

中国の嚴復の洋書翻訳事業とが比較さ
 れる。松蔭がペリーの黒船の乗員に与
 えた深い印象は、やがて『宝島』のス
 ティーヴンソンの創作意欲を刺激する。

鹿鳴館をフランスの海軍士官ビエ
 ル・ロティの叙述と芥川龍之介の反応

のうちに描き、プーシキンを配してロ
 シアと交差させる手法は、通常の史書
 には期待し難い視点だろう。夜会の空
 虚さを描く芥川の叙述の終局がダンテ
 の『神曲』の地獄篇第五歌を踏まえた

ことも、指摘される。緻密な細部を盛
 り込みながら、著者は洋行や翻訳、お
 雇い外国人の個別例から歴史を浮き彫
 りにし、広く知識を海外に求めた五箇
 条の御誓文から、列強の脅威をまえに

国粹へと変貌した教育勅語への
 経緯と変容とに明治を要約する。

第三部はそのアジア回帰を描
 く。ブリュンチエリーの国家有
 機体論の訳者となる友人、雨森

信成をモデルに小泉八雲が造形した祖
 国回帰像に、ホフマンスタールは脱帽
 し、「普請中」（森鷗外）の日本に外発性
 の悲哀を見た夏目漱石の「現代日本の
 開花」はその師匠ジェイムズ・マード
 ックの日本観に触発された反論だった。
 こうした指摘や仮説は極めて新鮮だ。

日露戦争後の日本は帝国主義の時代
 に巻き込まれるが、第四部は「戦争か
 ら平和へ」を掲げ、和解と同情、理解
 と側隠を通奏低音とする。第二次大戦
 終結にあたり表向き徹底抗戦の立場を
 貫き通した阿南惟幾陸軍大臣は、辞意

1 意込」 wochikochi
11号, 2006.
June/July
国際交流基金

を仄めかす米内海相を私信で密かに慰留し、鈴木貫太郎内閣の倒閣を回避し、終戦工作の成就を水面下で支援していた。陸軍の「大罪」を己が一死をもって償った阿南陸相のこの表裏の機微は、海外ではなお秘話に属するだろう。

第五部「文化間を跨ぐ解明の試み」は、酷薄なイソップ寓話が日本で「かわいく」変形された様を追う一方で、ダンテの『神曲』に土居健郎の「甘え」の機微を摘出する。西欧の愛と東洋の友情との比較からは、漱石『こころ』の英訳にみえる思わぬ誤訳の背景が解き明かされる。テクストの綿密な読み比べに立脚した相互照射は著者の信条。西欧が非西洋を解剖する横暴に対し、西洋を非西洋の視点から分析することの意義が再確認される。

例えば言葉に表すことを避ける「もののあわれ」を欧米の読者に理解させるには、いかなる手腕が要求されるだろうか。本書は川端康成の『山の音』を素材に、その模範演技を示す。文化間の隔壁に衝突して発生する葛藤は、第六部「東西のなかの日本の作家」で森鷗外などを通して分析される。

日本 本の対外膨張を、欧米の植民地政策と比較考量して「反帝国主

義的帝国主義」と定義する筆者は、日本の南方進出肯定論は、論理的に欧米支配肯定論に帰着する謬論だと、40年来一貫して主張している。殖民の成否は被殖民住民の意思表明により評定すべき、とする英国の学者外交官ジョージ・サンソムの見解に、著者は慎重に同意を表明し、その傍ら、いわゆる「東京裁判史観」は毅然として退ける。真珠湾攻撃の4日前、イタリアの外相チアノは日記に、日本がルースベルトの策略の術中に嵌ったと書き付けていた。

「あとがき」にこの洞察をイタリア語原文のまま引用した著者は、返す刀でピューリッツァー賞受賞のハーバート・ビックスの『ヒロヒト』（2000年、邦訳題『昭和天皇』）を、先人観固着の最悪の見本と痛打し、ジョン・ダワーズの『敗北を抱きしめて』（1999年）も、史料の取捨選択が都合主義的だと論難する。そこには占領時代の生き証人ならではの違和感の表明と、俗耳に訴える言論への警戒とが閃く。

自己の認識基盤の磐石を信ずる博言学者チェンバレンに点の辛い著者は、『源氏物語』の意義を英語圏の読者に初めて納得させ、老齢の博言学者に

「負け惜しみ」を強いた英国の詩人学者アーサー・ウェイリーに——サンソムと並んで——本書を捧げている。

異国の読者に向け、筆者の研究から明らかにになった説得力ある異論を提起して、世間出来合いの先入観を揺さぶり、視野の限界を広げる。とともに、読者の認識を刷新する。著者はこの企てにおいてウェイリーの衣鉢を継ぎ、東アジアにおけるその系譜の後継者をもって任ずる。東西の価値観の差異は尊重しつつ、その断絶に橋渡しを試み、信頼ある相互依存を築くこと。そこに筆者が、幾多の文化障壁を乗り越えて本書刊行に託した希望もある。

謡

曲の『敦盛』の一章詞を、ウェイリーは「邪悪な友を退け、徳ある敵を招け」と訳していた。アナトール・フランスの響に倣って「黄禍」の裏には「白禍」ありき、と喝破する著者の自称 jaundiced prejudice が、今後英語圏の読者のあいだで、その名に値する「徳ある敵」virtuous enemy として認知され、永く遇されることを期待したい。白楽天に肖ろう。野火がひとたびは草原を焼き払うとも、後に吹く春風がいやましの芽吹きと豊かな収穫とを約束するように、と。

本誌購読ご希望の方へ

- 本誌の購読をご希望の方は、最寄りの書店または山川出版社にお申し込みください。

本誌の主な常備店

八重洲ブックセンター本店/ジュンク堂池袋本店/丸善丸の内本店/三省堂書店神田本店(東京・神保町)/岩波ブックセンター(東京・神保町)/紀伊國屋書店新宿本店/紀伊國屋書店新宿南店/ブックファースト渋谷店/東京堂書店神田本店(東京・神保町)/有隣堂本店(横浜・関内)その他全国主要書店で取り扱い中。

- ファックスによるお申し込みの場合は、左の用紙裏面をご利用ください。
- 山川出版社の連絡先は次のとおりです。
〒101-0047
東京都千代田区神田1丁目13番13号
電話 03-3293-8131

編集長 伊藤実佐子

編集委員 猪木武徳

粕谷一希

樺山紘一

千野境子

四方田犬彦

編集 麦谷真理子

三好正人(山川出版社)

表紙デザイン・本文レイアウト

柴永事務所

遠近 第11号

2006年6月1日発行

定価 525円(本体500円)

送料 210円

発行 国際交流基金

〒107-6021

東京都港区赤坂1丁目12番32号

アーク森ビル21階

電話 03-5562-3538

発売 株式会社山川出版社

©2006 国際交流基金

(本誌記事の無断転載・放送を禁じます)

- 本誌は再生紙を使用しています。

本誌に対するアンケート(左の用紙)にお答えください。お答えいただいた方には国際交流基金(ジャパンファウンデーション)主催の催し物入場券・割引券などを送ります。

国際交流基金(ジャパンファウンデーション)ホームページ アドレスのご案内

- アクセスをお待ちしております。

<http://www.jpfc.go.jp/>

- 本誌に対するご意見・ご要望は、以下のアドレスまでお寄せください。
wochikochi@jpfc.go.jp

訂正とお詫び 「遠近」第9号27ページ掲載の写真キャプションに誤りがありました。右側の女性は王效賢さんではなく、韓秋芳さんでした。訂正してお詫び申し上げます。

次号予告(『遠近』12号:2006年8月1日発売予定)

特集 春樹をめぐる冒険

——世界は村上文学をどう読むか(仮題)

いま世界で愛読されている現代作家の一人、村上春樹氏の作品の翻訳に焦点をあて、国や世代を超えて共感を集める普遍的な魅力がどこにあるのかを探ります。世界各国のハルキブームを見比べながら、私たちの知らなかった村上文学の魅力を発見する「冒険」に参加しませんか?

wochi kochi
11 遠近

編集後記

●もう四半世紀も前のことですが、当時暮らしていた豪州では、サイゴン陥落を受けて、一気にアジアを肌感じていました。同じ時代の米国が、人種のるつぽ論で同化を語っていたときに、豪州はすでにそれとは一味違った「多様性と共に」という方向性に一歩踏み出していたようです。エスニック・アイデンティティを保ち、かつ豪州人であることを精神的支柱とするという、政府の唱える United in Diversity に帰結したプロセスがそこにありました。ミドルパワー同士の日豪のおつきあいは、友好条約締結から30年という短期間のものではなく220年に及ぶという関根氏の指摘に、本誌名をかけて、ますます「惚れあう」間柄になりたいものと思った次第です。小特集に「ソフトパワー」をとりあげました。国際政治上のパワー論を文化に当てはめることに矛盾があるという小倉氏の論考は、要注目です。(伊藤)

●「多様性の中の統一」と言えば、古くは多民族から成るインドネシアの国是として、最近では25の加盟国を抱えるEUのテーマとして耳にする言葉でした。多文化を尊重しながら国としてのまとまりを目指す豪州の「多様性の中の統一」は、規模こそ違え、日本にも共通の課題ではないでしょうか。今回の特集では関根政美先生と豪日交流基金に大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。(麦谷)

●写真や資料の提供依頼で海外の機関と連絡をとることがあります。短期間のやりとりですが、それぞれのお国柄が現れて楽しいものです。今回オーストラリアの方々とは突然の連絡にも、誠実かつ迅速に、しかも親しみを込めて応対してくれ、個人的に好感度がぐっとアップしました。各公共機関のITによるサービスや検索システムも他国以上に充実しています。意外なところで、この国の底力のようなものに触れた思いでした。(三好)

地球を、開けよう。

JFサポーターズクラブに入りませんか。

国際交流基金(ジャパンファウンデーション)の会員制度「JFサポーターズクラブ(JFSC)」のパートナー会員、アソシエイト会員の方々は1年間、毎号をお届けしています。この機会にぜひJFサポーターズクラブにご入会ください。詳しくはウェブサイト <http://www.jfsc.jp/> または情報センター 電話03-5562-3538まで。